長洲町立長洲小学校　校長便り　No.8

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年5月16日(月)

《雑感》最近の社会①

澤田の独り言としてお読みくださいね。（受け売りの部分が殆どなんです。）

以前、ある校長先生から「最近の社会」という話を伺う機会がありました。その特徴がある故に、子ども達の様々な問題が起こるというのです。何回かに分けて紹介します。一般論ですので客観視していただくことで何かの糸口になるかもしれないと考えています。私自身も戒めなければならないことばかりです。

近所付き合いが無い

私は生まれてから大学に入るまで、四軒ぐらいの長屋に住んでいました。（五〇年程前の新地団地です）狭いながらに向こう三軒両隣の付き合いがとても楽しかったことを覚えています。実は、この頃の思い出を子ども達によく話すのです。最近は隣の人の名前はおろか、顔も知らないということもあるそうですね。これは地域教育力の低下にもつながっているような気がするのですが。長洲小学校区では如何でしょうか。我が家は世代が入れ替わるにつれ、ご近所との繋がりも薄くなっているように思えてなりません。恥ずかしながら私自身、近所の方々と言葉を交わすのは、とても少ないです。挨拶だけでもと思うのですが…。

愛語録

本はいいですね。読んでいると色々なことを学ぶことができます。こんな言葉を見つけました。抜粋して紹介します。

叱ることと怒ることは違います。
叱るとは怒りの感情を抑え、子供のためになること（愛情）を子供が理解できる言い方（理性）で説得すること。
子育てに必要なのは、愛情と理性。
親が子どもに恥ずかしくない生き様を見せるのが、何よりの教育。

如何でしょう。この言葉は、私には最近の大人に対する警鐘だと感じます。教職に携わる者としては特に身に詰まされます。プロですから、感情に任せて言動のコントロールができない状態にはならぬよう心がけています。

すぐキレるのは、
自分の気持ちを表現する適切な言葉を知らないから。
たくさんの本を読んで言葉を知ればストレスは溜まらない。
言葉が足りないのは本を読まないから。
美しい言葉に触れ素敵な表現を自分の中にストックする。
意思の疎通は言葉ありき。

子どもを叱るためにも、言葉を知るためにも、読書は重要なんだということを端的に表現してある文章だと思いませんか。

そう言えば最近、すぐにキレる子やわがままを言う子、更には暴力的攻撃的な子は、右のような状況が多いように感じます。言葉を知らないので、うまく説明が出来ないのです。説明ができないと、「もういい、言っても無駄。」等と言って、話もせず、こちらの動きを伺うような言動をすることもあります。精神的な部分が大人になれず、いつまでも大人の愛情に甘え、その中でしか虚勢を張ることができないのです。精神発達が未熟な時期は、これでも集団の中で何とか大人のコントロールによって集団生活を送ることができます。しかしこのような状態は、中学高校では通用しません。生徒達が社会的な視点、客観的な視点に立ち言動をコントロールし始めると、社会通念や常識から外れ、虚勢だけ張っているような生徒の周囲からは友達が消えていくからです。だからこそ、早いうちから学習することが大切なのです。

シリーズ「自分を語る」#8

小学校に入学してからは行動範囲も広がり、いわゆる「生徒指導の決まり」等は無視同然の、「感無し」の生活が始まっていきます。

私が小学校に入学した頃、両親は共働きで、私たち兄弟は「鍵っ子」でした。父はパン工場で働いていましたが、シフトの合間を利用して親戚がやっていた水道配管工事を手伝っていました。母もこれを手伝っていました。私たち兄弟は、両親が同じ仕事場に行く場合は現場に連れて行かれ、そこで遊ぶことになる訳です。高学年になればそのようなことはありませんでしたが、当時の遊び道具は大工道具や現場に落ちている木端、釘金具などでした。だからでしょうか、今でも工作や物を作ることが大好きです。

当時、長屋時代の新地団地に住んでいましたので、鍵っ子なんて言っても周りにはたくさんの大人がいて、家に入れなくてもよく声をかけて頂き、退屈する間もありませんでした。向こう三軒両隣の付き合いがまだ生きていた時代で、夏場は近所のおばちゃんが、夕立がくると洗濯物を取り入れてくださったり、私達の面倒を見てくださったり、人情味豊かな近所付き合いがありました。

私の母は私の弟が小学校に入学した後、パート働きを始めます。私の母の話を紹介します。多少、脚色してありますが…。

「お母さんな中学までしか行っとらんけん、給料のたっか（高い）仕事にゃ就かれんだっぱってん、どしこでん仕事のあった。仕事ばしてから給料は貰うてから郵便局に行くとの楽しみだった。あん頃は利子のたっかったけん、貯金のいつの間にか増えよったもん。仕事すっとのほんなこて楽しかった時代たい。あん頃、お母さん達が辛抱して真面目に仕事ばしよったけんが、今のあるとだけん。時代の違うばってん、敦たちゃまだ甘かもん。まち～っとしっかりせにゃん。」

母からしてみれば、私などまだまだ子どもなのでしょう、確かに仕事をしていて、何かに甘えているような気がすることがあります。しかし、今の仕事の中で、「真摯に」仕事をしなければならないって思うのは、母の思いを受け継いでいるのかなって思います。そう考えると、まだまだ自分には余裕があるのかもしれません。

さて、小学校1年生時に、忘れもしない事件が起こります。私の1・2年生時の様子は、担任の先生から見ると、どちらかというと「おとなしい」と言った方があてはまるかもしれません。そんな澤田君を、体調不良が襲います。この出来事が澤田少年を極限まで追い詰めることになるとは、誰も考えることはありませんでした…。その事件とは…？　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）